

俵万智 ぬけぬけと

2009年から15年までの作品が三章に編集されている。第一章は、三人目の子どもを身ごもった母親の身体感覚が新鮮だ。

・生まれたいか わたしの体を貸しましよ
うか ちいさく跳ねるひかりに間えり
子どもは分身ではなく、この世に出てく
るために母親の身体を間借りする存在なの
だ、というとらえ方が独特で目をひく。

第二章の冒頭で、東日本大震災が起こり、その約三か月後に子どもが誕生する。震災は原発事故をも引き起こした。

・もうこんなに伸びている爪 色粘土や砂
やわからぬもの挟みこみ

微笑ましい子どもの日常の一コマだが、この一首前に「父の住む家のそばには放射能を含める汚泥の高ばかり増ゆ」が置かれて
いると、下の句の「わからぬもの」が、単
にその他もろもろという意味ではなく、不

気味に迫ってくる。

・ひとりずつ喉に棲ませたる鳥のちいさ
なつばさの見えざる傷よ

詞書には「甲状腺は蝶や鳥が羽根をひろ
げたような形」とある。放射線の影響を案
ずる気持ちだが、可憐な比喻によって、かえっ
て痛ましく伝わってくる一首だ。

第三章には、放射能や甲状腺といった直
接事故を思わせる語彙は減るのだが、日常
を詠んだものの中に、不吉なニュアンスが
漂い、気にかげながら忘れる…いや忘れら
れない、という胸苦しさが感じられる。

・「冷蔵庫冷えなくなつたよ」「もう長く
つかったもんね」「ただの箱だね」

・チャーハンの上にグリーンピースあり転が
り落ちやすけれど美し

長く使った原発は冷えなくなつたが、た
だの箱にはなつてくれなかつた。落ちやす
いけど美しいグリーンピースは、何かを暗喩
しているように見える。文明？ ささやか
な日常？

・力点はオリンピックにもう置かれ天秤の
皿の上の東北

復興五輪という言い方もあるが、復興よ
りも五輪に、世の中の関心が力点を移して
いる。天秤皿に載るような大きさと東北を
見つめている眼差しが切ない。

・みんなもう忘れかけてるとりどりにスカ
イツリー色をかえてきれいだ

東京の電気をつくつてきた福島。きれい
だとして、言えないよね…。投げ出すよう
な結句に、無力感がにじむ。

・逃げてつた帰ってきた地震ののちに罅わ
れてゆくわれのふるさと

本来なら連帯しあう人たちが、分断され
てしまう。地震だけだったら、こんなこと
にはならなかつたのに。

・なかなか引き抜きにくい釘抜けぬまま
ぬけぬけと都市の明るし

「なかなか」と「ぬけぬけ」。早口言葉に
登場する「引き抜きにくい釘」。楽しい言葉
遊びの歌かと思いきや、ぬけぬけとに籠も
る静かな怒りと批判に気づいてはつとずる。
都市は今でも明るい。ぬけぬけと。ではこ
の釘は何だろう。原発？ 電気に依存する
文明？ その釘を「抜け抜け」という声に

も聞こえる。ウィットに富んだ一首で、声
高ではない怒りはこの歌集を象徴している。